

長寿社会における生涯学習

シビルNPO 連携プラットフォーム 副代表理事

花村 義久



いきなり個人的なことで申し訳ないのですが、私の妻の母は107歳で、この5月1日令和に入り5つの元号で人生を送っていることとなります。我々リタイアを65歳だとすると、あと40年あまりあるということとなります。この長寿社会でその時間をどう過ごすのか、長寿社会では生涯学習がますます重要になります。

中央教育審議会では生涯学習の振興方策について、生涯学習とは学習者が自発的に行う自由で広範な学習、趣味・教養のみならず社会との関りを通じて個人の生き方や考え方に変化をもたらすあらゆる活動を意味する。今からは、高齢社会というマイナスイメージから長寿を想定した人生設計を行い、社会から支えられる存在でなく地域社会の主役へ向かうべきである、と述べています。

地方自治体でも国の方針に呼応する形で生涯学習の問題に取り組んでいます。私の住んでいる船橋市では、市で作成した生涯学習基本構想・推進計画に基づいていますが、ここでの重点目標は、生涯を通じて学び続けるとともに、学びで得た成果を地域に活かしてつなごう、としています。1次計画では前者が主でしたが、2次計画では後者に力点が置かれています。市では現在国の新たな動きをにらんで、第3次計画の作成に取り掛かっています。

ふなばし市民大学校（学生500人）の私も委員をしている運営協議会では、今までの授業内容が時代に合わなくなったため、委員会のもとに知識人によるカリキュラム特別委員会を設置し抜本的見直しを始めました。その中には生涯学習コーディネーター育成の学科もあり、学習内容や方法の工夫、充実が検討されています。

私が会長を務めている生涯学習コーディネーター連絡協議会（会員190名）では、各公民館など公共施設を中心に市民の生涯学習活動の推進と地域の問題解決のための様々な活動をコーディネーターとして行っています。昨年、組織の活性化と活動の新たな展開のために、会員全員を対象にアンケート調査を行いました。意見が直接文章で出せるような方式を取ったのですが、結果は会員の考えや希望が百人百様という状態でした。それを見て、組織の推進力はこの多様性をどう活かしていくかに掛かっている、そしてそこでは一人一人の自発性が非常に重要であると感じました。

土木学会では、今年の4月号で土木技術者の「学び」について特集を組みました。ここでは、時代の変化、世代別の特性や世代間交流など、いろいろな角度から議論がなされています。この中で特徴的なのは、学習を教育と明確に区別し、従来の土木学会継続教育（CPD）制度を土木学会 CPD 制度に変更し、CPD に対応する言葉を継続教育から継続学習に変更したということです。技術者の活動と技術者であるために必要不可欠な要素である学びを、学びと実践の関係で捉えて整理し、今後を展望しています。

土木を市民社会やまちづくりなどの面から考える時、生涯学習と市民活動とは緊密な関係にあると言えます。関係機関との相互の連携やネットワークの構築、地域活動と学習成果の活用、コーディネート機能の整備・人材の育成・世代間交流などは大変重要です。

人間が生まれたときに誰も侵すことが出来ない人権を持っているように、高齢者集団は一つの人格を持つ存在として社会に認知されるべきです。長寿社会における生涯学習は、学びながら生きる力を、そして社会の変化に対応できる総合的な力を身に付けていくものです。我々はその過程のなかで、個人個人の持つ力、その時々発揮できる自分の能力に応じて、社会に答え生活をしていけばいいのではないのでしょうか。